3. 実施学年の担任の立場から

山　田　雄　一

前述のように，「人間について考える」というテーマで，我々総合学習グループは，今年度中学3年生を対象に，ゆとりの時間を利用して，全部で10回の授業をそれぞれの方向から試みた。たまたま，私は中3Aの担任であったので，生徒といっしょにその10回の授業を生徒側の目で参観できたし，ホームルーム担任として，生徒の生の感想や意見もたびたび耳にすることができたので，その角度から，本年度の総合学習授業の実施について，若干の報告をしてみたいと思う。

(1) 生徒の生の声

総合学習授業を実践した時間は，木曜の5・6限のホームルームの時間で，主に第6限であった。この時間はクラス活動の時間で，ゆとりを持ってクラス活動ができるよう2時間があてられている。私は，担任としてこの時間は，生徒にHR企画運営委員というものを設け，なるべく生徒達自身が，企画・運営できるようにした。当然，ソフトボールやバレーボール等の球技，ホームルーム内では，ゲームやクイズ等のレクリエーション的な要素が，この時間内に数多く行われたし，ゆとりの時間ということで，5限で企画が終わると，6限をカットしたことも多かった。又，学校祭の合唱・演劇コンクールや，各種の競技大会が近づくと，その練習に2時間フルに活用することもあった。もちろん進路指導等，ホームルームとして欠かせない事がらは定期的に第5限に入れた。

その木曜第6限に，総合学習が10回入ったわけである。本来はレクリエーション的な時間であったり，カットであったり，クラスマッチの練習のかき入れ時である時間に，教師側の企画により，この授業が入ったわけである。

これだけで，生徒の生の声が，どのようなものであるかは，察しがつくであろう。前述のアンケート結果でもそれを如実に表わしている。前日の連絡で，「明日の6限は総合学習」という連絡をすると，決まって「なんだ，早く帰れると思ったのに」とか，それが学校祭前であると，「先生，合唱の練習はどうなるの，下級生に負けちゃうよ。」等という言葉が飛び出したものである。多くの生徒達の心に，自分たちのホームルームの時間に，教師側から一方的に，授業が入って来たという気持ちがおこったのは否めない。とは言うものの総合学習のどの授業でも，その授業が終わった後はSTやそうじの時間まで，その問題に関する討論が行われている時もあった。例えば，三橋先生の授業で，「妊娠中に自分の子が，ダウン症候群とわかった時，それを承知で生んで育てるか，堕ろすか」という問題に関して生徒に手をあげさせたことがあった。多くの生徒は生んで育てる方に手をあげたが，いっしょに授業に参加していた私は，堕ろす方に手をあげた。そのため，その日の清掃の時間に多くの女の子たちに糾弾され，討論するはめになった。つまり，どのテーマも多くの生徒たちは，身近な，興味ある問題としてとらえ，聞いていたことは確かである。明日の6限が総合学習という連絡をした時，「今度の先生はだれ？」とか，「どんな内容？」と聞きに来る生徒も，実際多かった。

(2) 反省と改善していきたい方向

本来は，レクリエーションの時間であったり，早く家に帰れる時間をこの時間にあてたため，不服も多かったが，英語や数学の時間を，「明日は総合学習の時間にします」という連絡をしたならば，きっと拍手の方が多いだろう。15才の子供たちの即物的思考の表われで，当然の事であろうが，要は，授業に対する動機づけという点においては，失敗したと考えられる。以下，ホームルーム担任の目で見た反省点を列挙し，考えて見ることにする。

①総合学習の授業が，臨時変更的にホームルームの時間に介在した点

普通どの教科でも，きちんとカリキュラムの中に位置づけられ，生徒はいやおうなしに，その時間はその教科を学習するという，根本的な準備はできているわけだが，総合学習の時間はそれがなかった。又，楽しい時間を浸食するという心理的嫌悪感を抱く生徒もいただろう。例えば，4月当初から，木曜6限をホームルーム，ゆとりの時間ではなく，総合学習の時間と固定し，それを随時，ホームルームやカットに変更するという逆の変更をしていたら，同じことでも心理的に心構えが違っていたかも知れない。もっとも，カリキュラム内に組み込むということは，学校全体の問題で困難点も新たに生じて来るだろうし，実際6限に位置づけるとしたら，もう少し数も増やし，計画的・継続的に実施していかないと，名前だおれに終わってしまいそうで，我々の負担は倍増するだろうが。

②それぞれの授業に関連性が乏しかった点

もし，前述のように，カリキュラム内での位置を確保し，少なくとも隔週ぐらいで実践できれば，全体としての流れもつけられようが，ひどい時には2ケ月近くも総合学習の授業から遠ざかり，急に，別の先生が別のテーマで授業を始めれば，我々が，どんなに念頭に，人間という大きなテーマを置き，関連を意識しても，生徒の側では単発授業でしかなくなってしまう。HR担任として，ST等で授業と授業とのつなぎの部分を，もっと補えば良かったのかも知れないが，それができるまでの話し合いも余りなされなかったため，前日の連絡での場つなぎ的導入は，ほとんど効果をなさなかった。

授業内容も，それぞれの先生が，それぞれの専門的立場から授業するという傾向で，総合学習という名のもとに，まだ教科の枠を抜けだせない面があった。我々の最初の意図に教科の枠を越える授業という柱があったことからして，やや残念である。各授業の関連性という面で，一授業一教師という枠を取り払い，たとえば第1回の教師が松井なら，第2回を松井・田中の2人，第3回が田中，第4回が田中・徳井の2人といったふうに，橋渡しを確実にし，それぞれの自分の授業を，前段階・本番・後段階と，最低3回は実施し，前後の段階では，流れと関連性をふまえた，複数教師による授業ならおもしろかったのではないか。そうすることで，その教師の本番にあたる授業の，予習・復習的要素も生徒の中に位置づけることができよう。

③教材・テーマが教師から一方的に与えられた点

前述のように，長いブランクを経て，単発のテーマで授業が行われる場合，生徒がそのテーマに興味を持ち始めた頃に，授業時間が終了してしまうということも少なくない。「人間について考える」という大テーマがあるのだから，オリエンテーション的な時間を確保し，その中で生徒達自らにテーマを考えさせていけたら，生徒達にとって授業も興味深いものにならないだろうか。生徒達の中から生まれた興味ある点や，疑問点に，それぞれの専門の先生が解説を加え，深めてゆく。自分たちの考えたテーマなら，グループ毎に，そのテーマに関して下調べさせ，発表させても良いだろう。人間として大人に成長しつつある15才の生徒の内にあるものを，生徒達自らの手で，表面に出させたい気がする。

この点に関しても，②で述べたように，前後計3回の時間を確保すれば，第1回めで，生徒の関心点や疑問点を浮かび上がらせ，第2回にそれに沿った授業，第3回めで，その授業に対する生徒それぞれの意見・感想・疑問点を発表させ，討論するといった形で，生徒の授業への参加意欲も増すかも知れない。実際，各先生が授業の後で，生徒たちに感想文を書かせた，それを担任として毎回読むことが出きたか，意外と，どの授業にも興味を示し，新たな疑問点やもっと深く知りたい点を感想として書いている生徒もいた。そういう意見や感想・疑問を次の授業に反映させて行ければ一層興味深いものになるだろうし，「これは，○○君から出た意見だが……」という言葉だけでも，他生徒のそのテーマに対する関心度は増すと思われる。

(3) 総合学習授業を通しての一成果

担任として，授業の実践もしなかった私が，実際現実のカリキュラムではできそうもない理想論をふりかざし，勝手なことを述べて来た。授業の成果云々は，どんな授業でも測るのは困難だろうし，実際，試験もなく，「人間について考える」という大テーマの，この一連の授業が，どんな成果を持ち，生徒たちにどんな影響を与えたかなど，私に書けるはすもない。人間について，それにまつわる新しい事実を知り，人間についてそれぞれが考えてくれる時間であればよい，ぐらいの考えで始めたものだったと思う。

しかし，この一連の総合学習授業のおかげで，担任として一つの生徒指導に大いに役立ったことがあるので紹介しておきたい。

今年度，中3A担任として，我がクラスで一番頭を悩ませた事件は，体の弱い生徒を，クラスの男子が多勢でいじめる，という事であった。こういうことは，どの学校にもあることだろうし，この学年も中一の時からあったようだが，その内容が担任の知らぬうちにすごくエスカレートし，ひどいものになっていた。昨今の中学生は，我々大人の測り知れない程の行動をするのは周知だが，我がクラスも例にもれず，その実体を知るに至るや，単なるいたづらの域を越えたひどい事があった。そして，信頼していた多くの生徒がそれに加わっていたり，女生徒もみんなひどいことをしていると知りながら見て見ぬふりをしていた。その事実が私の耳に入り，何度も何度も生徒達を呼び出し，指導し，話し合った。いじめたどの生徒も，あまり悪意はなく冗談としてやっていたようだ。総合学習の授業の後の感想文に，「人間は実に偉大で，我々は人間であることを誇りに思い，人間であることを大切にしていかなくてはならないと思った。」と書いた，エリート生徒までが，人間として許せないようないじめの，中心人物であったことに愕然とした。こういういじめっ子たちは一人になると大変素直で，いい子たちなのだが，集団となってその場に居合わすと，何も考えずに遊びの気持ちでひどいことをするのだった。そして，何度もそういう生徒たちと話し合ったのだが，そうい

う場で「人間が大切なこと」についていろいろ話をする課程で，総合学習で学んだ，人間の歴史・ロボットやサルとの違い・心の問題等，共に話し合うと彼らは実によくわかり，いっしょのホームルームで習ったことなので，実に説得力があった。実際，その時の反省文に，「総合学習の授業で，人間の大切さがよくわかったのに，実際の場でそれがわからなかった自分が恥ずかしい」と書いた生徒もいた。生徒指導に与っては教科指導と違い，専門分野を教えるのではなく，人間対人間という関係で，いろいろ問題点を指導していかねばならない。中々我々の言うことを心の中にまでしっかり受けとめてくれるケースは少ない。が，今回の事件にあたっては，総合学習で数回，いっしょに人間について考えてきた生徒であったため，まだ未熟な担任の言葉を心の中まで受け入れてくれたようだ。本校の村上校長も，人間を大切にすることをモットーにしていて，この事件を遺憾に思い，中3の生徒全員に対して特別に訓話をしたが，その言葉は，いくつかの面で，偶然だが，総合学習授業のねらいの部分と重なり生徒の心に大いに突き刺さり，大勢の生徒が涙を流して聞き入った。

どの生徒も，その時，心の底から反省し，人間尊重を心に焼きつけた。私は，未熟な私の説教を，真剣に受けとめ，校長先生の話に大勢が涙まで流した背景には，総合学習で「人間について考え」てきた一成果があると評価したい。総合学習における授業は，教科の枠をとった教科指導ではあったと思うが，生徒指導という教科外指導に，担任として大いに役立てることができたのである。

我々の総合学習授業は，一つの試みにすぎないが，教科の枠を取り払うにとどまらず，そういった教科外の事項へ寄与していくという点で，一成果を果たせたことを担任として感謝し，かつ総合学習の一つの姿として，教科外活動・教科外指導への貢献という面を，実感したことを報告したい。

4. 総合学習「人間について考える」をどう評価すべきか

田　中　裕　巳

(1) はじめに

1981年初春から開始した総合学習「人間について考える」の授業は，試行錯誤をつみ重ねながら，1983年3月の川田の授業（今報告2の(5)）をもって，いちおうのゴールにたどりついた。〝ゆとり〟の時間を利用してと言いながら，実際には，ほとんどが学級活動の時間を割いてもらうことによって成立し，あるいは教科の時間にも食い込んだりして，ようやくまがりなりにも用意された10の授業案がすべて実践された。1981年度および1982年度の中3の担任の協力なしには本グループの研究も成り立たなかった。御協力を深く感謝したい。

1982年の10月29日に本校の中等教育研究協議会があり，当日の公開授業も含めて，中間報告に対しての批判の場を設けた。公開授業は，昨年度本紀要において授業案の骨子を発表しておいた安藤富美子の「人間における性の役割」であり，事前の生徒たちへのアンケート結果を利用したり，グループの他の教師たちの発言も求める意欲的なものであった。当日の他の発表もあわせて次項でとりあげるが，「総合学習」の分科会は，名古屋近辺の学校を含めて総合学習の経験交流を行うことが出来て有意義であった。

中等教育研究協議会後は，残り4つの授業（高橋祐・三橋・白井・川田）が行われ，1982年度の試みは一応終了した。グループのメンバーのうち，4月1日で鈴木が定年退官，高須・増田が転出し，安藤の育児休暇中の代用教官として岡本が加わり，松井・川田が他グループに移籍し，1983年度からの新しいグループは，岡本（安藤）・白井・高橋祐・田中・徳井・三橋・山田・久保の実質8名となった。本論文ではグループのメンバーは，1982年度の研究に関わった者すべてを表記しておいたが，総合学習の研究グループは新メンバーのもとで新しい構想による研究（後述）に着手している。

(2) 中等教育研究協議会で問題になったこと

10月29日の中等教育研究協議会C分科会〝総合学習〟には，30数名の参加者があった。三重県立飯野高校（定時制）で既に総合学習を試みておられる冨山先生を始め，中・高にまたがる先生方が，私たちの試みの中にある問題点を指摘する一方，御自身の実践を紹介してくれた。分科会の2つの発表①〝総合学習を求めて〟（徳井輝雄），②〝授業についての反省と問題点〟（安藤富美子・田中裕巳）を簡単に紹介し，そこでの問題点を整理しておきたい。

①〝総合学習を求めて〟（徳井輝雄）では，徳井が